

額

が前に張り出しているのが己が顔の特徴の一つなのだ、今こそ何も思わないものの、子どもの頃から思春期にかけてずいぶん長期にわたって気にした。小学生の頃は、誰も彼も容姿の特徴を指摘するのに容赦はないので、でこだの何だの毎日のように言われた。まあ、こちらも言うのではあるが。

そのうちテレビアニメで赤塚不二夫の『もーれつア太郎』が始まると、主要キャラクターに「でこっぱち」なる子どもが登場し、異様に突き出た額を惜しみなく晒したので、途端に「でこっぱち」がぼくの代名詞になり、散々に言われた。

今の学校だと、訴えがあればそのような言動は「いじめ」とされ、被害加害を検証して、念入りに指導する。教育委員会に報告書も挙げる。当時、同様に扱ってもらえればこちらは溜飲を下げたかも知れないが、その代わり、仕返しに浴びせた暴言や「どうせ、でこっぱちだ」と打って出た頭突きも問題視されたと思う。まあ昭和の子どもたちは、訴え出ることなど思いつきはしなかったのだが。

ただ、いくらほじぎ返しても内面化はしていくもので、思春期になると誰もからかわなくても、膨らんだ自意識があれこれ考えさせ、隠そうと努めるようになった。同時にそういう自分に腹立たしさも感じてい

たので、あるとき行きつけの散髪屋で「お任せしま

す」とそれまでつけていた注文をいっさい言わなかった。散髪屋のオヤジさんは、全とお見通しだった。ぼくの前髪をバツサリ落とすと額をすつかり露わにして、「こつちの方がいいよ。」と言った。すぐにはそれに同意できず、翌日の友人たちの反応にも動揺しきりだったが、しばらくするとどうでもよくなってきた。オヤジさんがぼくを解放してくれたことを知った。自分に似合っているかどうかなんて悩むくらいなら、人に任せてしまえばいい。

「退職記念に何がいいか考えてください。予算は…」職員に言われて、何がいいだろうか考えた。何でもいい、というのも職員には苦痛だろうし、ギフトカードだと簡単だが、渡す方もおもしろくないだろう。自分で選んで買ってもらう形にすることもできるのだけど、思いの感じられないただの物になってしまうようで味気ない。

ふと思いついたのが、自転車のヘルメット。必需品と言われながら、そこまで必要かためらっていたのと、デザインが気恥ずかしく踏み切れないでいた。こは、職員に見立ててもらって、どんな一品が届こうが大切に使用おうと決めた。久しぶりに散髪屋のオヤジさんのことを思い出した。



専業ババ奮闘記(その2) 46

木幡智恵美

里帰り(7)

バタバタした日々を過ごすうちに、宗矢の一月健診の日が訪れた。付き添って産院に行く。体重は四五〇グラム、四週間で一五〇グラム増えている。一日平均増え率の三倍もの増えようだ。このまま膨らみ続けるとどうなるか、逆に心配になる。娘の方も順調な回復で、入浴もオッケーということになった。あと二週間は無理をしないようにと言われたらしい。明後日は新築の家に戻ると言っているが、大丈夫だろうか。

寛大の時も実歩の時も、里帰りはだいたい二か月だった。今回ひと月で帰るのは、建ったばかりの家のことが気にかかっているだろうし、義母の世話もある私を気遣っているのもあるだろう。こちらとしては、まだ回復が十分でない娘の体で、寒い中、生後一か月の宗矢を抱えて寛大や実歩の送り迎えをすることが心配なので、当分は夫と私が交代で玉湯まで行き、保育所の送り迎えを申し出た。

実歩が産まれたのは梅雨に入る前で、何度も寛大の汗を拭きながらの夜を過ごした。今回は寒い時季で、風邪をひかせないことが最大の課題だった。二人とも気が付くと布団から出ているので、度々起きて布団の中に押し込めねばならなかった。特に、アレルギー性鼻炎の傾向がある実歩は、鼻づまりで寝苦しい様子が度々見られたが、病院につれていくほどのことはなくて済んだ。ようやくそんな生活から解放されるということと少し気が抜けたのか、娘たちが帰る日の朝はいつもより遅くまで眠った。

義母をデイサービスに送り、寛大、実歩が保育所に行ったあと、宗矢の風呂の準備にとりかかる。先日、娘の職場の先輩が持ってきてくれたベビーバスタブをビニールシートの上に乘せる。湯が漏れるのを気にしなくてもよくなったが、それも今日で終わるか。

午後、娘と宗矢、諸荷物車を乗せ、新居に向かった。宗矢の寝床をセットしてから荷物をおろし、ちゃちゃつと整理する。家に帰って残った荷物を積み込み、保育所に寛大と実歩を迎えに行く。二人を乗せて向かう先は、我が家ではない。寛大と実歩の本当の家だ。どんな顔をして家に入るのだろうか。

30代フリーター やあ、ジイさん。N T Tによる総務官僚らへの高額接待問題は東北新社の場合より大きい闇が感じられる。

年金生活者 「サイバー権力」として成長しつつある大手IT企業と、それをコントロールしようとする「国家権力」とのせめぎ合いの過程で発生した問題ととらえることができる。

「サイバー権力」とは私が勝手に名づけたもので、G A F A（グーグル、アップル、フェイスブック、アマゾン）などに代表される巨大IT企業がネット上での取引などのプラットフォームを提供する見返りとして膨大な利用者の情報を手にし、それによって個人の行動を追跡、誘導、制御する力を指す。

G A F Aなどが国家を超えるグローバルな権力と化しているのに対し、N T Tはまだ日本ローカルにとどまっている。それでも、携帯電話分野で寡占企業のひとつに成長し、「サイバー権力」と呼び得る存在となっている。

と指摘したことをとりあげ、このままだとトヨタは日本から出て行き、日本の製造業が消える日が来ると書いている（「トヨタは日本から出て行くのか」、アゴラ、3月13日）

もともと資本主義はモノをつくる産業からつくらない産業へとその牽引車を替えてきた。その結果、エネルギー消費量が減少に転じていることを池田が指摘している。IT産業の急成長で資本主義の「脱物質化」が加速し、日本では2000年代前半にエネルギー消費はピークアウトした、と（「資本主義の『脱物質化』で人類の未来は明るい」、アゴラ、1月1日）

この先、「脱炭素」「カーボンニュートラル」が進んでも、地球の温度は体感じられるほど下がることはないが、世界の産業の様相は目に見えて変わるだろう。それは人びとの生活の利便性が増すことを意味する。

30代 世界はバーチャルへ、というわけか。 年金 インターネットはリアルな社会

30代 デジタル庁の新設を目指す菅政権はその「サイバー権力」をかなり警戒しているように見える。

年金 携帯電話料金の値下げ圧力を強めたのも「サイバー権力」に対する「国家権力」の巻き返しの一環と見ることができると。総務官僚はそうした「サイバー権力」とのせめぎ合いの最前線に立つ存在であり、どんな手段を使っても任務を遂行しなければならぬ。接待は「サイバー権力」の側からの応戦のひとつにほかならない。

国家は歴史上さまざまなインフラを整備することによって権力を維持してきた。古代中国の専制国家は農業用の大規模な灌漑工事をやったし、戦後日本の民主国家は高度経済成長をあと押しする交通網や通信網を整備した。

それと同様に巨大IT企業はネット上での通信や取引などを可能にするプラットフォームという名のインフラを整備することによって諸個人、諸集団がリアルな国土の上でそれをするのに

の諸機能を代替することによって、バーチャルな空間にリアルな社会をモデルにしたもうひとつの社会をつくりあげた。さらにそれだけにとどまらず、リアルな社会そのもののインターネット化、バーチャル化を進めつつある。

インターネットが代替しているリアル

対し、「サイバー権力」はバーチャルな空間で同様のことをしている。

30代 政権が新しい売りにしようとしている「脱炭素」「カーボンニュートラル」はリアルな課題だ。

年金 その推進はモノをつくる産業をいま以上に衰退させ、モノをつくらぬ産業を拡大するだろう。

モノをつくるのに要する1次エネルギーの大半は化石燃料で占められている。「脱炭素」「カーボンニュートラル」の実現にはエネルギー消費全体を抑えざるをえない。そのためにはモノづくり産業を減らし、代わりにエネルギーをあまり使わない産業、とりわけITを中心とした産業を増やす必要がある。それは「産業のソフト化」を通り越した「産業のバーチャル化」と呼ぶことができる。

経済学者の池田信夫は、日本自動車工業会会長の豊田章男（トヨタ自動車社長）が記者会見で、今のまま2050年カーボンニュートラルが実施されると国内で自動車が生産できなくなる

ルな社会の諸機能の代表的なものは、通信のほか動画やテキストの配信など諸々のサービスの生産・流通やその決済だ。つまりリアルな空間でなくても可能なものだ。これに対し、モノの生産・流通はバーチャルな空間ではできない。売買にともなう決済ができるくらいだ。その限界を超えようとしているのが、IoT（モノのインターネット）だ。これが3Dプリンターと接続されると、インターネットのシステムの内側でモノの生産・流通ができるようになる。バーチャルな空間でリアルなモノの生産・流通が可能になるということだ。それはリアルな空間がバーチャル化することを意味する。

言葉は現実の諸事物を代替することによって、もうひとつの現実世界をつくった。それだけではない。現実を言葉のネットワークで覆いつくし、現実を言葉化した。人間は言葉なしには生理的な動作すら満足にできなくなった。いまその過程をインターネットが反復している。

ニュース日記 778
中村 礼治

世界はバーチャルへ